



## 鶏の写生

伊藤 大輔（美学美術史）



あけましておめでとうございます。2017年は酉年ですね。日本美術で鶏といえば、伊藤若冲が真っ先に思い浮かぶでしょう。今では大人気の画家で、雑誌やテレビでも度々取り上げられているので、ご存知の人も多いでしょう。

若冲は十八世紀の京都で活躍した画家で、当時、京都では写生がブームになっていました。出来上がったお手本から学ぶ伝統的な画法に飽き足らなくなった画家が、現実を自分の眼で観察し、自分なりの美を築こうとしたのでした。代表的な画家に円山応挙がいます。

若冲も熱心に写生に取り組みましたが、その時第一の対象となったのが鶏でした。鳳凰のような空想の鳥ではなく、現実に見ることができる羽毛のきらびやかな鳥として鶏が選ばれたのです。若冲の鶏は、細部まで精密に描かれ、羽毛の筋一本一本までもが丁寧に再現されています。しかし普通、人間の眼はそこまで細かくクリアに認識しているわけではありません。ですので、若冲の絵は当初の狙いから外れて、顕微鏡や望遠鏡などの道具を通して見た時のような異次元の視覚体験へと突き抜けてしまうこともしばしばです。

こうした問題に気づいていたのは近代の日本画家、竹内栖鳳ではなかったかと思われます。代表作「蹴合」では、二羽の軍鶏が激しく闘う姿が描かれます。しかしそこでは、細部を細かく再現することではなく、勢いのある大きな筆遣いでダイナミックな鶏の動きをとらえています。対象の実体的な現出ではなく、より私たちの視覚体験に近い形で、光学的な映像として鶏を再現していると言えます。

こうした現実再現の問題は、現代の仮想空間の創出、CGやVRやARの問題にまでつながってゆく長い射程を持っています。（画像は伊藤若冲筆「動植綵絵・群鶏図」[宮内庁三の丸尚蔵館]

学生たちの研究生活—File40

## 興味を学業に活かす

研究室名：中国哲学研究室

なぜ日本へ留学して中国哲学を勉強しているのか、最近よく聞かれる。

その理由はいくつかあるが、今回は「面白さ」に着目して、この間に答えてみたい。

「古典的学問を研究している」という真面目な顔の裏には、だれでも自分の好みやきっかけがあるであろう。私の場合、そのきっかけは夢枕獏の『陰陽師』という日本小説である。

大学二年の夏休み、私はたまたま、中国語訳の日本小説『陰陽師』を読み、その不思議な世界から抜け出せなくなっていた。そして、自



分の興味を学業にどのように活かすことができるかと考え、私は日本語を第二外国語として勉強することにした。卒業する時、自分の趣味・専門・外国語能力・将来やりたい仕事などを合わせて考えて、日本へ留学するという結論を出した。今年で留学も五年目になる。私は現在、『陰陽書』という唐代の書物を研究対象として、日本の陰陽道と中国の占術の歴史を研究している。これには、小説に負けない不思議な趣きがある。

実際に、多くの文芸作品には文化史や哲学思想の知識が含まれている。例えば、「陰陽五行思想」・「天人相関説」・「讖緯学」などは、時代小説によくある言葉であり、すべて中国古代の思想と深い関わりがある言葉である。そのほかにも、ゲームやアニメでもよく取り上げられている「四神」・「五帝」説などは、中国古代の民俗文化や道教思想と関係がある。もちろん、中国哲学の面白さは不思議な物語を読むことだけではなく、茶道・書道・禅学・宋学・仏教思想など、自らの幅広い興味と関心を活かし、その知識を深めることができることにもある。

何事も楽しく勉強するのは、とても大切なことであろう。(写真は2016年夏、南昌の滕王閣にて撮影)

[李 錚 (博士後期課程2年)]

学生たちの研究生活—File41

## 交易とモノの姿の変化

研究室名：日本史学研究室

名古屋大学に来て、もう3年が経った。研究生のころ、貿易・流通の全般に関心があり、江戸時代の日本と隣国の流通について勉強をした。本や論文を読んだり、授業でくずし字の解説について勉強したり、学生たちの発表を聞いたりしてきた。授業に関わることなら遠慮なく質問や発言ができるのはもちろんだし、研究室での休憩中にはほかの院生たちと議論ができる。ほかの院生たちと一緒に読書会をすれば哲学や理論の勉強もできる。



ときには大学を出て勉強をする。月に一回、大学を越えて人が集まる研究会があり、年に何回か、東京や京都で大きな歴史の学会がある。こうしたところへ出かけて行って、他人の研究発表を聞くのも良い勉強だ。そして、家に帰ってからも読書を続けた。

この3年間、こうやって勉強を続けながら、いまは近世の薩摩藩と大坂の関係に目をつけている。きっかけは黒砂糖の歴史である。黒砂糖は、現在の私たちが消費する砂糖とは少し扱いが違っていて、当時は輸入薬の一種であった。それが、長期間にわたる生産方法や消費のあり方の変化などを通じて、だんだんと嗜好品として扱われるようになった。

同じひとつのモノやことがらについてみても、現在と過去では人々の考え方は異なっている。砂糖の扱い方もそうした好例だ。それ以外にも、身分だとか「経済」だとか、過去にはどのようなものだったのか、同時代の人々の目で眺める必要がある。そうしたことに注意しながら、史料を読んだり先行研究を読み直したり、そんなことを毎日続けている。(写真は丸岡城の入口で研究室のみんなと)

[イゴル・コロチンスキ (博士前期課程1年)]

最近の文学部

## 「とり」年の始まり

昨年は多くのものが「去る」年でした。文学研究科が去り、4月から人文学研究科の下、文学部もより国際的で多彩な学問の場と生まれ変わります。実り多い「とり(獲, 撰, 穫, 捕, 採...)」年としたいものです。(YK記)

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...  
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで (『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)